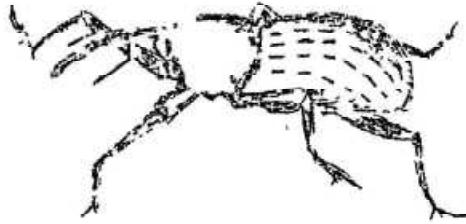


すゞせし

1953・VI



3-6

倉敷昆虫同好会

目 次

すむし Vol. 3 No 6

(1953年6月)

特別寄稿

岡山県に期待されるミドリシジミの新種	磐瀬 太郎	P. 1
<hr/>		
ホシミスジ覚之書(1)	広瀬 義躬	3 (2)
おとしぶみ(虫短信)		7~9
コムラサキの地域占有性観察	広瀬 義躬	7
チャバネセセリ燈火に飛来	全 上	7
ハツチョウトンボの一産地	小川 大石	8
キハダカノコガの訪花一資料	広瀬 義躬	8
テントウムシ幼虫の共喰い	全 上	9
本年のクロアゲハとアオスジアゲハの初発	小堅 洋	9
蝶の初見記録(1953前半期)	広瀬 義躬	9
<hr/>		
特大号発行予告、次号予告、はんしゅうこうき等		10

岡山県に期待される

ミドリシジミの新種

磐瀬太郎

江崎・白水画代兵衛「日本の蝶」エゾミドリシジミの項の末段に、当時未発表であったハヤシミドリシジミのことについて予告があり、これについて「又広島県下の帝釈峠及三次町には更に別の近似種と思われるものを産する。」と書いてあるのを御写しの力は多いと思う。

又ニュー・エントモロジスト 1 巻 1 号 18 頁に村山修一氏は「なほ私は別に是等（註、エゾミドリ、ハヤシミドリ）とは同一に取扱ひえないミドリシジミ一種を所有するが、これは又何れ専門家の発表もあることであろうから云々」と書いて居られる。

以上の両者が同じものかどうかは知らないが、*Favonius* にまだ未記載の一種があるらしいことは、注目に値する。

ところが最近兵庫県の本庄一氏から 同県佐用郡久崎の蝶 (2) と題する報文を送って頂いた（兵庫生物 2 巻 3 号、1953 年 4 月、pp. 153—157, 167）。これを見ると又オオミドリシジミ、ハヤシミドリシジミに似て、明かに異なる *Favonius* sp. のことが書かれていた。この蝶は 1934 年 6 月 17 日 久崎の谷で採集され、「既知の近似種との間に少なからぬ相違点があり、恐らく新種であろうと考えられるので、更に多くの個体を獲得するために毎年 6 月中下旬には必ず一度の採集を試みた」と記されている。それらは同好者に送附され、現在山本氏の手許には 3 個あり、1 号があるが、オオミドリにくらべるとの翅表は金線がかり、裏は銀灰色に近く、号では裏は灰色味が強く、号号共に鼻面 1 帯の幅は明かに広いのを特徴としている。

もしこの兵庫県の種が、広島県下の *Favonius* sp. と同じものらしい、岡山県は当然両者に狭まられて、同じものを産する可能性があ

2 (54)

う。又更に両者が別ものならば、岡山県には双方共に分布するかも知れない。県下同好諸君の努力を望んでやまない。

なお又白水氏は広島県の中村順三氏に宛てて、次の如く私信を寄せておられ、それが「比叢科学」25号にのせられてある。

“目下ヒロオビとハヤシミドリの関係はよくわからず、どうもヒロオビはハヤシミドリの1亜種(地方型)である可能性が大であります。これらは貴地の各地で多数の標本が採集され、両種の分布につき資料が集まれば、はっきり致しますので、大いに期待して居ります。云々”
(1952年1月16日付)

このヒロオビミドリシジミは明かに「日本の蝶」に出た「更に別の近似種」にあたり、恐らくは山本氏の *Favonius* sp. にもあたるものではあるまいか。

この蝶は嗚に上る林・白水両氏共著の「日本産全種の蝶類原色図説」(誠文堂新光社)にその正体を理ゆずか、否か不明であるが、岡山県下同好者会の一の努力目標として打ってつけの材料と思う。

標本の同定には白水先生をわづらしてほしい。

(10/VII, 1953)

なお帝釈峠におけるヒロオビミドリシジミの発見者は、現在米子県高校教官の中島矩正氏であると言う。

—— 会員外特別寄稿 —— —— 鎌倉市小町345 ——

(6頁より)分塘であつたらうと思われる。

* 行徳直己(1947): 幼虫の顔を被ったゴマダラチョウについて
自然研究 1(3): 34—35

附記:稿を終つて、最初から再読するとやや冗長なきらいがないでもない。いや自分にあると思う。よろしく御丁寧願いたい。皇朝で諸兄姉の御教示を御願ひする。 (27-VII, 1953 稿)

—— 倉敷市田之上 822 ——

会員消息、本会員中塚憲次氏は本年7月古巣の大原豊穂に復帰された。但し、昆虫とは縁が遠い化学方面を専攻。しかし今後本誌にバリバリ看かれる所。大いに期待したい。

ホシミスジ 覚え書 (1)

広瀬義躬

まえがき

この覚え書は筆者のホシミスジ研究の断片的資料収載の爲設けたものである。その資料は生態、形態から分布方面へと広く及ぶのでこの莫御承^りりたい。今後覚え書(2)(3)・・・と順次発表の予定、尙分浅学の身であるので大方の御教示を忝けなくする次第である。

§ 1. 成虫雄にみられる発香の事実

蝶の成虫で発香するものは、外国では多く知られているが、我国では2・3の種のみにはしか知られず、石原保代が戦後空塚昆虫館報へこの方面の綜説とも云うべきものを書かれて一般同好者の注意を喚起せられし後、余りこの方面は注意されていない種である。

筆者は本種成虫雄に於いて確實に発香の事実を認めているのでこゝに報告したい。その香気は現在何とも形容し難いが、我々人間が感じて快い香気であることは確かで、これは筆者のみならず数人の人をして確かめたものである。その発香の強弱に關しては、我国で発香の顕著なスジグロシロチョウ雄程の強い芳香は感知しないが、蝶体を鼻先に近づければ容易にその存在を知る。その発香源については、未だ明らかでないので今後の観察に俟ちたい。石原氏は蝶の羽化後発香機能を有するに至る迄には多少の時間を必要とし、新鮮な個体に於いては発香する種でありながら未だ発香現象が認められない事があるとして注意されているが、本種は羽化直後早くもその発香を感知し得る。雄の発香の場合概してその臭いは人体に快く感ずることは、石原氏も記されておる如く蝶の発香の一般的事実であるが、本種もその例にもれない。本種の雌には全然発香を認めない。

筆者は未だ他に1・2の蝶に発香の事実を知るが、多数の個体につい

4(56)

て確認していないのでその発表を保留している。同好詞士のこの方面への御注意あらん事を望む次第である。

*石原 保(1949)；蝶類の産産のこと，宝塚昆虫館報(57)；
8-10

§ 2 磐瀬太郎氏記載のホシミスジの卵，幼虫，蛹について

磐瀬太郎氏は戦前，昆虫界^Kに，戦後には宝塚昆虫館報^{K*}に本種の卵，幼虫，蛹等について簡単に報告されたが，その内現在の筆者の観察とは多少異なった点が卵，幼虫，蛹の形態に於いて見出されたので，ここに筆者の観察したありのままを記して御参考に供したい。

卵：全氏はコムスジの卵が緑なのにに対し本種では紺色であると記されたが，筆者の見るところでは灰色である。小さな卵ではあるが，紺色と灰色では色差もあると思う。

幼虫：全氏はオ3，10，11節気門下の山脈状紋は銀白色とされているが，筆者はこの様な色のものを見た事はなく，すべて緑色乃至黄緑色であった。しかしこの卵は全氏の日本産蝶類生活史巻(5)^{K*}に田淵行男氏が同種の筆害を観察されている古を記されているのであるが，田淵氏の観察では緑色の卵が多いと全部は否定されていない。筆者は現在迄多数の本種幼虫を飼育したが，この様な銀白色のものは全然発見出来なかった。銀白色と緑色とでは相当の差異があり，関東幼虫には2型が存在し或いはその2型の比が地域によって差異あることも考えられる。全国各地での検討が望ましい。

なお氏が記されたオ5・6節腹面の赤褐色部はオ4，7節にも及ぶ。しかしこの4・7節のものは相淡色で，且多少の変異を予想せられるところである。

蛹：全氏は本種蛹が金色斑を有することを記されたが，現在迄多くの蛹を筆者は見ただがこの様なものに出会わない。しかしこれも前述の全氏の巻(5)に同じく田淵氏の観察として同様に記されているので一寸

参考文献に記した次序である。

* 善澤太郎 (1942): タテハチヨウ科幼虫食之書, 昆虫界 10(106): 771-772

** —— (1949): 日本産蝶類生活史書(2), 宝塚昆虫館報(53): 7-8

*** —— (1951): 日本産蝶類生活史書(5): 11 (茅野蝶類同好会発行)

§ 3. 成虫の一飛翔習性

ミドリシジミ類の雄(特にアイノミドリシジミ, ジョウザンミドリシジミ等)に於いては, 直射日光を受けた枝先の葉に静止しており, 時折飛び立って樹間を敏捷に一巡し, 元の位置に戻って又静止すると云う種な習性が見られるが, 本種にも大体これと同種と思われるものを観察している。

すなわち成虫は地上 1.5~2m の稜に広がりを持つた灌木類(バラツツジ等)の中央附近の一段と高い部分に静止する。この場合必ずこの静止位置に直射日光が当たっており, 成虫は翅を 180° 近く展開して日光を浴びる。しかして時々成虫は静止位置より半径 1~1.5m 以内を緩かに弛回しつつ静止位置の高さと同程度の高さで飛翔し, 数回の弛回の後又元の位置に戻って静止する。ミドリシジミ類にみられるかくの如き習性には, かなり強い占有性が附随する種であるが(本種がこの習性を示している時, 他昆虫の侵入を観察していないので, 従ってその追飛も認めていないのであるが), 全般的にみてその占有性は強くない。この習性を示す個体がミドリシジミ類のそれと同種雄であるかどうかという点については未だ確めていない。この種な習性は同属のコミスジに於いてもよく観察されるところである。

* ミドリシジミ類のこの種な習性に関して

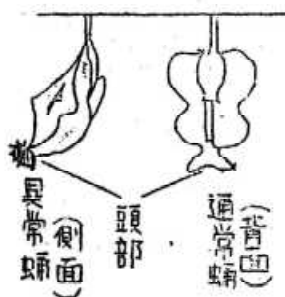
杯塚二郎(1951): 日本蝶類解説: 115

湯浅 謙(1953): 蝶が或る特定の場所に集まる事, MIKABO 4(14): 35-36.

§ 4. 幼虫の頭部を被った蛹について

行徳直己氏は自然研究にゴマダラチヨウ成虫体の頭部に幼虫時代の突起を有する頭部を被っている興味深い一例を報告された。筆者も成虫ではなくして蛹ではあるが大体同部と思われるような例を本種に飼育中観察したので参考迄に報告したい。

昨年(1952)4月11日倉敷市任吉町近藤光宏氏宅のコデマリで本種4令幼虫を採集し、以後コデマリにて飼育の結果、順調に生長しコデマリ及ユキヤナギ飼育中の幼虫のトップを切つて4月28日前蛹となり2日後より30日首尾よく蛹化したが見ると図に示す如く蛹体は普通



で羽化する場合との様な状態になるであろうかと興味深く思いそのまま何も触れずじつと羽化を待った。やがて5月17日に至り黒色化し蛹体の翅部に当たるところにま々と成虫翅表にみられる白斑が浮出しだんだんと判然として来たので羽化も同近しと注意して観察していたところ、

翌18日に至っても羽化せず遂に茶褐色化したので羽化が不成功に終わった事を確認し、同日夕刻蛹体を切開してみたところ、内部で成虫化して死亡していた。そして問題の頭部をピンセットで引きはがそうと試みたところ、頭部は蛹体に密着してはがれず丁度羽化時の蛹は軟化していたため遂に蛹体の頭部が幼虫の頭部の密着したまゝ、切断されてしまった。それほど幼虫の頭部は蛹体に密着していたのであった。これがこの蛹の羽化不成功の直接の原因がどうかは不明であるが、この例は行徳氏の報告された例(成虫)の一つ前の経過と考えられる。この例は筆者がたまたま観察した例であるが、蝶の成虫ではなくして蛹の場合であればこの様な事実はよくあることかも知れない。幼虫の蛹化失敗の一例と云えばそれだけかも知れないが、行徳氏の報告と合せ考えて興味深く思われたので一筆記した次第である。この蛹の体長は21mmで羽化したとすれば夢
(2頁へつづく)

おとしぶみ

コムラサキの 地域占有性観察

1952年8月18日倉敷市田之上に於いて本種1頭が土地占有性を顕著に示すのを観察した。

個体は勿論全て占有場所は農家の屋根の隣の一角で同種の蝶、トンボ等がその地域内に侵入すると猛烈に空高く追迫飛するのは新村太郎氏がその著「蝶の生活」に記されたと同種である。その他私が観察した群止場所はこの例も同種であるが、センダン、ヒノキ、ザクロ、カキ等ではないしその突端部か或いは極めて鋭角をなす部分に好んで止るのは面白い。而してこの例は湯浅謙氏がMIKABO Vol. 4, No. 14に記された如く蝶の占有性に共通な諸点、すなわち特にその場所に於いて1. 陽がよくあたる。2. 突出している。3. 視界がよくきく。のいずれの条件にも適合する。現在迄の私の観察によれば(未発表のものを含めて考えれば) Nymphalinae の大部分がこの習性を有すると思われる。本例も同様な事が観察されたのであ

るが Nymphalinae の蝶に於ける地域占有性が日甚近くなると共に助長されることは注目すべきである。(21-VIII. 1952)

— 広瀬義躬 —

— No. 209^{*} —

チヤバネヒセリ

燈火に飛来

25-VII. '52 P. M 10 筆者
自宅の電燈(60W)に本種1頭が飛来した。

当時の状況は晴、気温29.5°C 無風であり、他に少数の蝶の飛来をみた。燈火に蝶の飛来した例は少数あるが、本種の例はない種なので報告しておく。

なお本種は自宅附近(倉敷市田之上)では少ないものである。

(28-VII. 1953)

— 広瀬義躬 —

— No. 210 —

× ×

× ×

* 本号より後述(10頁)の理由の爲
通巻番号を附すことにしました。
(おとしぶみ35)

おとしがみ



ハツチヨウトンボの
一産地

53・6・21浅口、小田両郡の境にあつて浅口郡最高の山、遙照山に於いて、ハツチヨウトンボ *Nannopya pygmaea* RAMBER ♀を採集しました。

昨年採つて何やら判らず保存不完全の爲見失ひなつてしまひ後ハツチヨウトンボである事に気がついて再び行つて見ました。同定は安東氏にして頂きました。場所は小田郡山田村田村側、頂より約150m下つた所に新池と稱する池があり、これに沿つてはる泉道をこの池より約50m位上へ行つた所、右手の小さな向陽性沼沢地、周囲はコナラ、ノイバラ等々囲まれイグサ類、カヤツリグサ類スズメ類が主として生えています。この部分以外にも沼地はありますが見受けられませんでした。詳しく今度帰省の節に調べてみます。高度約280m位です。

— 小川大右 —

— No. 211 —

キハダカノコガの
訪花一資料

昼向或は夕方活動する少数の蛾類では訪花する事が知られてい^るが本種を含むカノコガ科の種が訪花する事実は、筆者は寧ろにして知らない。しかし筆者は次の如き本種の訪花例を観察し得たので報告したい。

13-VII. 1952

於、児島郡灘崎町清水

本種1頭がヒメジヨオン(白)

に飛来

*主としてスズメガ科のものに見られる。

昼向訪花 — ホウジャク、スカシバ等のスズメガ類、イカリエンガ矢野(松井氏観察、本誌 Vol. 2 No. 12。筆者も観察しており、花名判明次第報告の予定)、キクキンウワバ〜小西(1946)、杉(1950)等が報告されている。

夕方訪花 — その他の大型スズメガ類 (28-VI. 1953)

— 広瀬義躬 —

— No. 212 —

おとしづみ

ナミテントウ 幼虫
の共喰い

テントウムシの幼虫間に於いて共喰いの現象のみられる事はよく観察される事実に似ているが、筆者はナミテントウに於いて少々異った場合での共喰いを観察したので報告したい。以下は本年6月6日倉敷市田之上自宅附近のある1本のネコヤナギの葉上で観察したものである。

i) 幼虫が前蛹体を食すること：蛹化準備中の前蛹に幼虫が左右から各1頭づつ摂食し合っている例を2例も見た。

ii) 幼虫が羽化中の成虫を食すること：蛹より羽化したつある軟弱な成虫1頭と1頭の幼虫が摂食していた。成虫は羽化中であり逃げる事が出来ず、未だ軟弱なその体は幼虫の好餌となって腹部附近を無惨にも喰い破られていた。

なおこの頃は大体本種幼虫の蛹化期の最盛時の様である。

— 広瀬義躬 —

— No. 213 —

本年のクロアゲハとアオ
スジアゲハの初発

下記の如く筆者のみた本年の初発を報告しておく。

クロアゲハ 4月26日

和気郡 熊山

アオスジアゲハ 5月9日

倉敷市住吉町

— 小聖 洋 —

— No. 214 —

蝶の初見記念録

(1953 前半期)

今春の例年の発生と同程度或いはそれより少し早いと思われる蝶の発生メモを私のノートから拾い出して記してみる。

コミスジ 2頭 キマダラヒカゲ 4頭 ヒメウラナミシヤノメ 1頭 以上 4月26日黒田で

ゴマダラチョウ 10数頭 コムラサキ 1匹 以上 5月26日酒洋で キアゲハ 3頭 コチヤバナセセリ 2頭 以上 同日黒田で

— 広瀬義躬 —

— No. 215 —

すゞむし夏季特大号発行 //

おとしぶみ"通巻 200 篇突破記念

8月刊

"おとしぶみ"及 研究"特集

表紙上原紙使用 30~40 pp.

本会では本年8月上記の如く夏季特大号を
発行することになり 本誌8月号をこれ
にあてる事にしました。おとしぶみ優秀者、
さそ敬撰載、研究論文も数篇撰載、又諸先

おとしぶみ絶対30
篇以上掲載(優秀
なるもの)

乞御期待!
乞御投稿!

生方にも御寄稿を仰いでおります。よって会員額代より特大号用の
原稿を募集します。どんなもので結構、特に"おとしぶみ"、論文歓迎。
×切 7月末日(但、本号の発行が早く来たため1、2日の
遅れは目に見えます。この原稿を依頼致しましたので7月25日
としておりましたのは深く御詫ひします。しかしなるべく早く願
います。) 原稿宛先 倉敷市田之上822 広瀬義躬宛(直接或いは直接
に願います) なお希望者には別刷も致します。但、原稿用紙(400
字詰)2枚半以上に限り、おとしぶみは除く、又紙代等実費を
申し受く。以上の節々承知です。特大号御返稿を不願ひ致しま
す。

次号予告 (7月号) ~ 7月発行します。

我が家の庭に於けるカイガラ虫及び蟻と気温との関係
について、一 能野彌子。倉敷南部山脈縦断採集報告
(4日) 小笠 洋 etc.

へんしゅう
こうき

この表を置いてある 7月7日(6日) 倉敷へお送りしました。本号担当の
野野原昭代が専任のため一昨日交稿した次第です。しかし絶対合併号な
り出せしむ。こんからさうさく御了奉下さい。さて本号にはアマチュア取
集の大変、倉敷次郎氏が御寄稿下さるトソフを飾っています。寄稿下さ
った全代に強く御礼を申し上げます。天に於てもこの際研究に力を
ごさいたいと思います。いよいよ夏休み、諸氏の収穫を期待します(一)

すゞむし 第3巻第6号 倉敷市住吉町・岡山大学大原農業

昭和28年6月30日 印刷 研究所作物害虫研究室内
発行 全 廣瀬義躬 倉敷昆虫同好会
へんしゅう・いんさつ